

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 8 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23530824

研究課題名(和文) 社会システム正当化の深層過程—統制感覚と相補的世界観—

研究課題名(英文) The depth of system justification: Sense of control and complementary world view

研究代表者

池上 知子 (Ikegami, Tomoko)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90191866

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：人は、格差や不平等など不合理的な現実と直面すると、相補的世界観を喚起させ、平等幻想を生成することによって現行の社会システムを正当化することが知られている。本研究は、このような心理過程が環境に対する個人の統制感覚が低減しているとき起こりやすいことを検証することを目的とした。大学生を対象とするシナリオを用いた質問紙実験と社会人を対象とするWEB調査を実施したところ、概ね、予測を支持する結果が得られた。

研究成果の概要(英文)：It is well known that people who are confronted with the irrational disparity and inequality are likely motivated to justify the current social system through activating a complementary world view whereby creating an illusion of equality. The present study examines if such psychological mechanisms will be more likely to be instigated when people are deprived of their sense of control over their social environments. Results from a couple of scenario studies with college students and WEB surveys with working adults in principle provided supportive evidence for our predictions.

研究分野：社会心理学

キーワード：システム正当化理論 相補的世界観 平等幻想 統制感覚 格差 不平等

1. 研究開始当初の背景

(1) 平等主義を標榜する現代社会においては、格差や不平等を是正すべく努力することは一般的に「正しい (politically correct)」態度とみなされる。ところが、このような一般論とは裏腹に、Jost らはシステム正当化理論を提唱し、われわれ人間は社会的格差や序列を肯定する態度を潜在させており、それが格差や不平等の解消を妨げる一因になっていると主張した (Jost et al. 2010 など)。この理論によれば、人間は環境世界に秩序と安定を求めるゆえに、既存の仕組みや制度 (e.g., 自由主義経済、成果主義) の正当性を信じようとする根強い心性を備えているとされる。それは既存のシステムがもたらす格差や不平等を容認する保守的態度を導くことになる。なぜなら、格差や不平等を解消すべく現行制度を変革することは人々の認識論的・存在論的不安を喚起し精神的安寧を損なうことになるからである。

(2) ところで、一般に人間は、環境世界をコントロール可能なものと知覚しようとする傾向のあることが知られている。Kay らは、こうした主観的統制感は無秩序と混沌がもたらすストレスへの対処方略の一つであると位置づけ、もし個人レベルでこの統制感が脅かされると、これを補償するため政治 (現政権) や宗教 (神) など外在的な力に期待するようになり、人々が保守化するという補償的統制説を展開している (Kay et al. 2008)。

以上の議論を踏まえると、現行制度の下で不利な立場に置かれ個人的統制感を持ちにくい社会的弱者ほど、現行制度を正当化しよう動機づけられやすいという皮肉な構図が生まれることになる。

(3) もっとも、格差や不平等を生み出す現行制度の肯定は、自己高揚動機や内集団高揚動機、そして平等主義の理念と矛盾するため、人々にさまざまな心的葛藤をもたらすことも事実である (Jost & Hunyady, 2002)。そ

のような心的葛藤を緩和する機能をもつものとして相補的世界観が挙げられる。相補的世界観とは、ある次元で優る対象は別の次元では劣り、全体としてバランスが保たれる (e.g., 「貧しいが幸せな人がいる」「有能な人は冷たく人に嫌われる」という相補性の原理に関する暗黙の信念を指す。これはある次元での格差は別の次元により解消されるはずとの推論を導き、平等幻想を生成する (Kay & Jost, 2003; Kay et al. 2007)。格差や不平等の正当化を導く信念としては公正的世界観も古くから知られているが、これは弱者非難 (e.g., 「貧困は自己責任である」) を導く過酷な側面があるのに対して、相補的世界観は一見弱者擁護の感覚をもたらすため、より多くの人々に受け入れられやすい。とりわけ、自らの力では如何ともし難い不条理な現実と直面したとき、人は何らの力により相補性原理が働くことを期待するようになると考えられる。

2. 研究の目的

(1) 人々のなかに潜在する社会的格差や不平等を是認する態度を支える心理機制を、システム正当化理論の観点から、相補的世界観や環境に対する統制欲求と関連づけて明らかにするため、補償的統制説 (個人レベルでの統制感覚の欠如を外在的な力により補うとする考え方) に基づき、社会的環境や人生に対する統制感覚を阻害する状況に置かれたとき、外在的な力により相補性原理が働き、格差や不平等が解消されるであろうとの期待が高まるかを検証することを第1の目的とした (検討課題1)。

(2) 個人の統制感覚の欠如が外在的な力 (既存の制度や現政権) への依存を強め、人々を保守化させるという補償的統制説に基づき、個人の統制感覚の強化が不合理な現行制度への批判精神を醸成し格差を是正しようとする動機を喚起するかを検証することを第2の目的とした。(検討課題2)

3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究期間の4年間に大学生及び社会人を対象として、質問紙調査並びにWEB調査により相関的研究と実験的研究を複数実施した。実験的研究では、シナリオを用いて条件操作を行う手法を取り入れた。まず、本研究の主要な概念である統制感覚を測定する尺度を構成し、本研究の検討課題1について相関的研究と実験的研究を行った。その成果に基づき人々を格差や不平等の解消に動機づける手だてを探るという検討課題2に関する実験的研究を行った。

(2) 大学生を対象とする場合は、主に研究代表者の所属する大学及び近隣の大学での心理学関連の授業の場を利用した。授業担当者の了承の下、受講生に自由意志による協力を求め、授業終了時に質問紙を一斉に配布し、その場で記入してもらい回収した。社会人を対象とする場合は調査会社にWEB調査を依頼した。調査会社が運営しているサイトに質問項目をアップし、モニター登録している者にメールにより回答を依頼した。

(3) 研究組織は、申請者を研究代表者、申請者が指導する後期博士課程の大学院生3名を研究協力者として編成した。

4. 研究成果

(1) 相関分析 - 大学生の場合 -

本研究の重要な概念である統制感覚を測定する尺度の開発を試みた。尺度は、持続的で安定した個人特性としての統制感覚を測定できるような項目により構成した。統制感覚と関連すると考えられる既存の尺度や概念に関する文献資料を収集し、それらを参考に本研究の目的に適した項目を作成した。まず、尺度の信頼性と妥当性を検討するため、大学生214名を対象に質問紙調査を実施し、内的整合性や因子的妥当性、構成概念妥当性を検討した。本研究の基本的前提となる統制感覚と相補的世界観、及びシステム正当性信

念との関係を分析した。まず、因子分析の結果に基づき、統制感覚に関連する「自己効力感の欠如」「内的コントロール」「外的コントロール」のそれぞれに対応する下位尺度を構成し、これら下位尺度と相補的世界観及びシステム正当性信念との関連について相関分析を行った。その結果、「内的コントロール」と「相補的世界観」の間に有意な正の関係が認められ、「自己効力感の欠如」と「外的コントロール」の間に正の関係、「自己効力感の欠如」と「システム正当性信念」の間に負の関係が認められた。これらより、人は相補的世界観を信ずることによって個人内要因である努力の効果を信じることができ、現行システムの正当性を信じることによって自己効力感を維持していることが示唆された。ただし、「相補的世界観」と「社会システム正当性信念」の間に直接的関係は認められなかった。

(2) 相関分析 - 社会人の場合 -

また、各尺度項目から抜粋し構成した測度を用いて30代、40代の社会人男女360名を対象にWEB調査を実施した。得られたデータを分析した結果、「統制感覚」と「相補的世界観」の間に有意な正の相関がみられ、「相補的世界観」と「システム正当性信念」との間にも有意な正の相関が見られた。加えて、WEB調査では、日本の学歴社会に対する見方を尋ねたところ、「学歴決定論(学歴によって将来が決まる)」を信じている者ほど、「統制感覚」が低いという関係が認められ、同時に「相補的世界観」と「学歴社会肯定論」との間に正の相関が認められた。大学生同様に相補的世界観によって個人の統制感覚を維持している構図が示唆された。ただし、大学生と異なり、統制感覚とシステム正当性信念並びに学歴社会肯定論との間には有意な相関関係は認められなかった。なお、社会人の場合は、相補的世界観を信じることによって、現行の社会制度を正当化していることが同

えた。ただし、現行の社会を正当化することと個人の統制感覚は直接関係していなかった。

(3) 補償的統制理論に基づく検証

補償的統制理論の妥当性について検討を行った。すなわち、統制感覚が低い個人、統制感覚が剥奪される状況に置かれている個人は、相補的世界観や相補的ステレオタイプが喚起されやすくなり、その結果、平等幻想が生成され、現行の社会を正当化するようになるという仮説を検討した。

まず、社会人 360 名を対象とする WEB 調査のデータに基づき分析したところ、相補的世界観を信奉しているほど、現行の日本社会システムを肯定する関係が、個人特性としての統制感覚が高い者より低い者においてより顕著に見られた。

加えて、日本社会は学歴によって社会的成功が決まると信じている場合に、相補的世界観によって現行の社会システム（学歴社会）を肯定する傾向が顕現化することが示された。換言すれば、「学歴社会」への自己統制感の低さを相補的世界観への信奉によって補い正当化していると考えられる。

ただし、学歴社会において相対的に不利な立場にあると考えられる高卒者が、大卒者と比べて、統制感覚が低いという結果はみられず、また、高卒者のほうが相補的世界観により現行社会を肯定視する傾向が強いという予測を支持する結果も得られていない。

一方、大学生 178 名を対象としたシナリオ用いた質問紙実験では、結果が幾分異なった。ここでは、相補的ステレオタイプの喚起が平等幻想を生成する過程が、統制感覚の水準により異なるかどうかを検討した。経済的成功度に差のある 2 人の人物が登場するシナリオを 2 種類作成した。ひとつは、成功者と失敗者は有能性と社会性の評価が相補的であるように構成し（相補条件）、もう一つは、両次元での評価が非相補的であるように

構成した（非相補条件）。非相補条件に比べ、相補条件において、2 人の人物の幸福格差が小さく見積られる傾向によって平等幻想の生成の指標とした。分析の結果、相補条件では、非相補条件に比べ、幸福格差が小さく知覚される傾向が認められたが、仮説に反して、その傾向は、統制感覚の低い個人より高い個人において顕著であった。この理由として、統制感覚の高い個人は、日頃より相補的世界観を信奉することによって、自身の統制感覚を維持しているためではないかと考えた。

そこで、実験的操作により個人の統制感覚を一時的に変化させる手続きを用いて大学生 185 名を対象にシナリオ実験を行った。具体的には、Kay et al.(2008)のパラダイムに倣い、半数の参加者には、最近、自分に起きた良い / 悪い出来事のうち自身のコントロールを超えて（自分の意志や努力と関係なく）起きたと考えられる事例を想起させ、一時的に統制感覚が低減するよう働きかけた。残り半数の参加者には、自身の意志と努力の有無によって自分に起きた良い / 悪い出来事を想起させ、統制感覚が一時的に高揚するよう働きかけた。そのあと、上記と同じく有能性と社会性が相補的もしくは非相補的關係にある成功者と失敗者の登場するシナリオを提示した。その結果、相補条件は、非相補条件に比べ、2 人の幸福格差を小さく知覚する傾向がみられたが、その傾向は、悪い出来事が自分のコントロールを超えて起きた事例を想起した条件で特に顕著となった。この結果は、仮説を部分的に支持するものであった。

相関的研究では、理論と矛盾する結果となったが、因果の方向性の特定が可能な実験的操作を用いた研究では、補償的統制理論に沿った結果が得られた。

(4) 統制感覚と不平等是正動機

他者に起きた良い / 悪い出来事を観察す

ることによって、環境へのコントロール感覚が変化し、その結果として、相補的世界観や相補的ステレオタイプが平等幻想を生成する過程が促進もしくは抑制され、格差是正への動機づけ（アファーマティブ・アクションへの支持）に影響するかどうかを検討した。

まず、大学生 129 名を対象にシナリオ実験を実施し、学歴格差が本人の意志や努力によるか、本人の意志や努力とは無関係であるかに関する認識を操作し、前者のほうが統制感覚は強まり相補的ステレオタイプによって現行システムを正当化する過程が抑制されると予測した。予想通り、努力や意志によって社会的成功や失敗が左右されるとするメッセージに接触した条件のほうが、相補的ステレオタイプによって現状を正当化する（格差是正動機が抑制される）傾向が緩和された。ただし、社会的経済的格差の原因が内的要因に帰属されたことにより、自己責任論が喚起され、格差や不平等を是正する動機自体が抑制された可能性がある。他者に起きた出来事は、自分に起きた出来事とは、環境や人生に対するコントロール認知に及ぼす影響が異なる点に留意する必要がある。人々を格差や不平等の是正に向かわせる要因としての統制感覚の源泉について、さらなる検討が望まれる。

加えて、大学生 77 名を対象に実施したシナリオ実験では、相補性事例への接触により幸福度における平等幻想が生成されると格差是正への動機が抑制されることが示されたものの、個人が保持している相補的世界観自体は不合理な社会構造によってもたらされる格差への感受性を高め、格差是正への動機を強めることが示された。これまで考えられてきた相補的世界観のもつ機能について新たな課題が浮上した。

< 引用文献 >

Jost, J. T., Liviatan, I., Van der Toom, J., Ledgerwood, A., Mandisodza, A., & Nosek, B. (2010). System justification:

How do we know it's motivated? In D. R. Bobocel, A. C. Kay, M. P. Zanna, and J. M. Olson (eds.), *The psychology of justice and legitimacy: The Ontario Symposium*, 11, 173-203. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Jost, J. T., & Hunyaday, O. (2002). The psychology of system justification and the palliative function of ideology. *European Review of Social Psychology*, 13, 111-153.

Kay, A. C., & Jost, J.T. (2003). Complementary justice: Effects of 'poor but happy' and 'poor but honest' stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.

Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How complementary stereotypes help us to rationalize inequality. *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 39, 305-358.

Kay, A. C., Gaucher, D., Napier, J. L., Callen, M. J, & Laurin, K. (2008). God and the government: Testing a compensatory control mechanisms for the support of external systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 18-35.

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

池上 知子 2014 偏見と差別の発生メカニズム 教育と医学 第 62 巻 10 号(736 号) 4-13 頁 査読無

Yada, N., & Ikegami, T. 2014 Compensation versus halo effects in competitive or cooperative social settings: Mediation effects of social comparison-based emotions. *Urban Scope* Vol.5 27-40.

<http://urbanscope.lit.osaka-cu.ac.jp/index.html> 査読有

池上 知子 2014 差別・偏見研究の変遷と新たな展開 - 悲観論から楽観論へ - 教育心理学年報 第 53 集 133-146 頁 査読有

矢田 尚也・池上 知子 2013 都市的心性としての競争志向性と対人認知様式 都市部大学生と対象とした検討 都市文化研究, 15, 55-67. 査読有

矢田 尚也・池上 知子 2012 対人認知における相補性の生起過程 - 社会的比較感

情の役割- 人文研究, 63, 9-26. 査読有

〔学会発表〕(計 11 件)

矢田 尚也・深田 啓太・池上 知子 なぜ冷たい人は有能に見えるのか -対人認知の相補性に関する一考察- - 日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集 pp.159 ポスター発表 P110-02 北海道大学(北海道・札幌市) 2014 年 7 月 27 日

Ikegami, T. Paradoxical relationship between disidentification and bolstering of status system The 17th General Meeting of European Association of Social Psychology Symposium 21 "Ingroup disidentification: Concept, measurement, antecedents, and consequences" Programme pp.75 S21:05 The University of Amsterdam Amsterdam (Netherlands) 2014 年 7 月 9 日

池上 知子 平等主義文化における排斥と蔑み 日本感情心理学会第 22 回年次学術大会 シンポジウム1「いじめと文化」におけるシンポジスト 日本感情心理学会第 22 回大会プログラム・予稿集 Pp.24 宇都宮大学・峰キャンパス(栃木県・宇都宮市) 2014 年 5 月 31 日

Yada, N., & Ikegami, T. Compensatory judgment in person perception and system justification. The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Program Book, G240, pp.341. The Austin Convention Center Austin(U.S.) 2014 年 2 月 15 日

矢田 尚也・池上 知子 対人認知における相補性の体制正当化機能 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集 pp.57. 筑波大学(茨城県・つくば市) 2012 年 11 月 18 日

池上 知子 統制感覚と相補的世界観の関係 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集 pp.239. 筑波大学(茨城県・つくば市) 2012 年 11 月 18 日

矢田 尚也・池上 知子 対人認知における相補性と体制正当化 日本グループ・ダイナミクス学会第 59 回大会発表論文集 pp.88-89. 京都大学(京都府・京都市) 2012 年 9 月 23 日

Yada, N. & Ikegami, T. Impressions and emotions as determinants of interpersonal behaviors. The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Program Book, E153, pp.201. San Diego(U.S.) 2012 年 1 月 28 日

Ikegami, T. Complementary worldview as a motivator to redress inequality. The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Program Book, B253, pp.135. San Diego (U.S.) 2012 年 1 月 27 日

矢田 尚也・池上 知子 競争志向性と対人認知における相補性 日本社会心理学

会第 52 回大会発表論文集 pp.357. 名古屋大学(愛知県・名古屋市) 2011 年 9 月 18 日

池上 知子 学歴格差の原因帰属が相補的事例効果に及ぼす影響 日本社会心理学会第 52 回大会発表論文集 pp.214. 名古屋大学(愛知県・名古屋市) 2011 年 9 月 18 日

〔図書〕(計 1 件)

池上 知子 格差と序列の心理学 - 平等主義のパラドクス ミネルヴァ書房 2012 年 (総頁数 203 頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池上 知子 (Ikegami Tomoko)
大学院文学研究科・教授
研究者番号: 90191866

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

矢田 尚也 (Yada Naoya)
大澤 裕美佳 (Osawa Yumika)
鈴木 文子 (Suzuki Ayako)